



花を咲かせる

校長 長谷川 豊

あじさい

紫陽花がきれいに咲いています。

紫陽花は、その土地の土の性質によって花の色が変わると言われています。正しくは、青い花の紫陽花は酸性土壌で鮮やかな青色になり、赤い花の紫陽花はアルカリ土壌で鮮やかな赤色になるそうです。紫陽花がもっているももとの色と土の性質がぴったり合ったときに、鮮やかな色の花を咲かせます。

子どもの躰や教育に通じるものがあるように思います。子どもにとって最大の環境は、保護者の皆さんであり、私たち教職員です。私たち大人の務めは、その子どもがもっている色（よさや可能性）を見つけ出し、その子に応じて酸性になったりアルカリ性になったり、ときには中性にもなって、その子がもっている色の花を鮮やかに咲かせてやることです。

「教育 (education)」の「educate」は、元々の意味は「引き出しを開ける」です。外から見て何が入っているか分からないものを引き出して、中身を明らかにすることです。子どもの中にある目に見えない力を引き出してあげる、子どものよさや可能性を引き出してあげる、これが私たち大人の役割です。

保護者の皆さんと私たち教職員がそれぞれの立場で、自分と子どもとのかかわりを考え、子どもにとって何がよいかについて話し合い、子どものよさや可能性を引き出してあげることができたときこそ、本当の連携・協力ができたと言えるのだと思います。

手塚治虫さんは、「ガラスの地球を救え～21世紀の君たちへ～」で書いています。

「ダメな子」とか、「悪い子」なんて子どもは、ひとりだっていないのです。もし、そんなレッテルのついた子どもがいるとしたら、それはもう、その子たちをそんなふうに見ることしかできない大人たちの精神が貧しいのだ、ときっぱりと言うことができると思います。一見、大人の目から見てダメに見える子どもの中にも、大人に眼力がないために埋もれたままになっている何かがあるはず。ひとりひとりの子どもたちの、内部に眠っている宝のような何かに届く大人の眼差しがいま、求められているのではないのでしょうか。

子どもは大人以上に敏感に感じ取る力があるように思います。大人に対する観察力は鋭いものがあります。どの大人が本気になって自分のことを見てくれているか、私たち大人の眼差しを敏感に感じ取っています。

小針小学校の教職員は、レッテルを貼ったり、ある一面だけを見て決め付けたりせず、心を真っ白にして一人一人の子どもを見つめます。そして、子どものよさをもっと発見したい、可能性を引き出したいという眼差しで一人一人の子どもをしっかりと見つめていきます。その子がもっている色の花を鮮やかに咲かせるよう努めます。